

氏名	おだにまさのり 尾谷昌則
学位(専攻分野)	博士 (人間・環境学)
学位記番号	人博第265号
学位授与の日付	平成17年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科人間・環境学専攻
学位論文題目	自然言語に反映される認知能力のメカニズム ——参照点能力を中心に——

論文調査委員	(主査) 教授 山梨正明	助教授 河崎 靖	助教授 三谷 恵子
--------	-----------------	----------	-----------

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、認知言語学のアプローチが言語現象の記述、説明の基盤とする参照点能力 (reference-point ability) の観点から、日本語の所有関係、接続関係、数量詞遊離、等の言語現象の体系的な記述と説明を試みた研究である。全体は8章から成る。

第1章では、認知言語学のアプローチの基本的な言語観と認知言語学のパラダイムの背景となる基本的な概念についての説明がなされている。特に本章では、認知言語学の科学観に基づいて、本研究の記述、説明の基盤となる参照点能力と一般的な認知能力の関係、さらに後者の能力と言語能力の関係を考察している。

第2章では、まず日常言語に反映される参照点能力の位置づけを明らかにするとともに、後者の能力の構成概念である参照点、ターゲット、アクティヴゾーンの関係を明確に定義している。本章では、参照点能力を構成するこれらの基本概念に基づいて、これまでの言語学の研究で省略現象として扱われてきた言語現象に対するより一般的な説明を試みている。従来 of 言語学の研究で採用されている省略分析は、言語レベルに深層レベルと表層レベルの二つのレベルを設定し、深層レベルの構成要素が表層レベルにおいて削除されるという省略の変換操作を前提としている。これに対し、本研究では、これまで省略現象とされてきた言語現象 (特に、換喩表現、照応表現、等にかかわる現象) は、表層レベルの言語形式を参照点として、この参照点からターゲット (あるいは、参照点からアクティヴゾーン) に至る認知プロセスを反映する言語現象として再規定している。

第3章では、認知言語学の観点から参照点能力の心理学的な実在性が検討されている。一般に、参照点能力のモデルは、空間領域においてある対象 (ないしはターゲット) を探索していく認知活動を基盤としたモデルである。そのため、基本的に参照点という概念は、目的の対象となるターゲットを同定するために話し手の側が利用する情報全般を指す概念として規定されている。これに対し、本章では、参照点を經由してターゲットを認識するプロセスは、聞き手 (ないしは解釈者) にかかわる認知プロセスである点、また、参照点の認定によって起動されるターゲットの候補の支配領域は、複合的な知識のドメインによって起動されるフレーム的知識である点を明らかにしている。また、本章では、ラネカーの提唱している言語表現と発話事態のグラウンディングの概念を再検討し、これまでの認知言語学の標準的な分析で提案されている参照点構造の発話事態の起動操作のなかに、話し手と聞き手の共有知識へグラウンディングする認知操作も含めるべきであるという主張がなされている。

第4章以降は事例研究である。まず4章では、参照点能力の観点からみた連体助詞「の」に関する認知言語学的な分析が中心になっている。従来の研究では、連体助詞「の」によって規定される「Nの～」(N=名詞) の構造は、意味的に〈所有〉、〈動作主〉、〈親族関係〉、等の意味で多義的であるという事実は指摘されている。しかし、これまでの研究では、この統語構造に共通する認知機能の一般的な規定はなされていない。本章は、「Nの～」の構造は、表層レベルにおいては以上の多義性を有するが、これらのいずれの用法であれ、「Nの～」の部分から参照点の機能をにない、後続の「～」の部分

がこの参照点によって起動されるターゲットの候補の支配領域を規定する機能をにう構造となっている点を明らかにしている。さらに本章では、「Nの～」の構造を一般的な認知スキーマとして規定し、この構造にかかわる〈所有〉、〈動作主〉、〈親族関係〉、等の意味は、(これらの個々の用例の命題内容が指定する文脈において)[スキーマ→インスタンス]の認知リンクによって具現化されるトークンとしての意味として一般化される。

第5章は、日本語の数量詞遊離に関する事例研究である。これまでの先行研究は、連体数量詞と遊離数量詞がパラフレーズの関係にあるという事実のみを重視していた。その結果、従来の研究では、この種の数量詞のもつ独自のスキーマ的な意味が注目されてこなかったと言える。本章は、まずこの種の事実を指摘した上で、連体数量詞は参照点構造を反映する機能をにない、遊離数量詞は動詞が表わす行為の結果の側面を数量的に特定化する機能をにうという事実を明らかにしている。この規定により、先行研究で指摘されてきた両表現の特徴である〈全体読み〉と〈部分読み〉という違いが生じる原因も自然に説明している。さらに、本章では、連体数量詞の表現は一括スキミング、遊離数量詞の表現は連続スキミングを反映した構文であるという注目すべき事実を明らかにしている。

第6章では、参照点能力に基く日本語の助詞「ハ」／「ガ」の再分析を試みている。伝統的な国語学(ないしは日本語学)の研究では、一般に、「ハ」は話題ないしは主題に関する旧情報、「ガ」は文レベルにおける主語の新情報を示す用法であるという事実は指摘されているが、この種の情報機能の認知的な違いは明らかにされていない。本章では、「ハ」は、しるべき談話文脈においてある対象を焦点化する機能をにう点に注目し、「ハ」によってマークされる話題ないしは主題は、参照点の機能をにう存在として規定する。これに対し、「ガ」は「ハ」がマークする参照点が起動するターゲットとしての命題の叙述対象を認定するマーカーとして規定する。「ハ」と「ガ」に関する以上の規定が与えられるならば、従来の〈「ハ」=旧情報〉／〈「ガ」=新情報〉の区分は、参照点構造の一般的な機能(すなわち、認知済みの参照点と情報付与のターゲットの機能の区分)からの自然な帰結として一般的に規定することが可能となる。

第7章は、参照点構造に基づく接続表現の考察に向けられている。本章では、接続助詞によって統括される従属節と主節を、それぞれ参照点とターゲットの機能をにう要素として規定する。そして、この規定に基づいて、接続表現の表層分布を予測するモデルとして、参照点起動の複合ドミニオン・モデルを提案している。基本的にこのモデルは、従属節の事態(P)を参照点として利用し、そこから因果関係によって想起可能な帰結の候補からターゲットとしての主節の事態(Q)を解釈するモデルである。このモデルに従えば、例えば「P-(な)ので、Q-した」という接続表現は、「P」が従属節としての参照点として機能し、主節としての「Q」が因果関係の帰結(すなわちターゲット)として従属節に後続する事実が、参照点／ターゲットに関する一般的な情報機能の制約として予測されることになる。

第8章では、参照点能力の制約に基づく言語現象の記述と説明に関する本研究の意義と一般的な展望が論じられている。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、認知言語学の分析の基盤をなす参照点能力の観点から、日本語の所有関係、接続関係、数量詞遊離、等の言語現象に関する分析を試みた実証的研究である。これまでの認知言語学の研究では、参照点能力に基づく分析は、統語現象を中心に研究が進められているが、文法の他の部門にかかわる言語現象に関する分析は殆どなされていない。本論文は、認知能力の中核部分を構成する参照点能力に基づいて、統語論にかかわる言語現象だけでなく、意味および談話・テキストにかかわる言語現象の体系的な記述と説明を試みている。

本研究では、日本語の所有関係にかかわる言語現象に対し、参照点モデルに基づく統一的な分析を試みている。従来の研究では、所有関係にかかわる構造(「Nの～」の構造)に関し、〈所有〉、〈動作主〉、〈親族関係〉、等の意味で多義的であるという指摘はなされているが、この統語構造に共通する認知機能の一般的な説明はなされていない。本研究は、(i)この種の構造は、いずれの用法であれ「Nの～」の部分が参照点の機能をにない、後続の「～」の部分が、この参照点によって起動されるターゲットの候補の支配領域を規定する機能をにう点を明らかにし、さらに(ii)この参照点分析に基づき、〈所有〉、〈動作主〉、〈親族関係〉、等の多義性を参照点構造に基づいて統一的に説明している。

さらに本研究の独創的な点は、参照点とターゲットの認知プロセスに基づく言語分析を、所有関係にかかわる言語現象だけでなく、接続関係、数量詞遊離、等の言語現象にも広範に適用し、言語分析におけるユニフィケーション的な説明(すな

わち、言語現象の個別領域を越える統一的な説明)を試みている点にある。

先行研究における数量詞遊離の分析では、変形操作に基づく連体数量詞と遊離数量詞のパラフレーズ関係(ないし同意性)だけが重視され、この種の数量詞のなう認知的な意味の違いは明らかにされていない。これに対し本研究は、言語主体の参照点の移動(ないしは焦点の移動)にかかわる認知プロセスに注目し、連体数量詞がかかわる表現は一括スキミング、遊離数量詞がかかわる表現は連続スキミングを反映する表現であるという事実を指摘し、従来の形式文法における変形操作のパラフレーズに基づく両数量詞の統語規定の限界を明らかにしている。本研究は、さらに以上の認知分析に基づき、両表現の〈全体読み〉と〈部分読み〉の違いを、一括スキミングと連続スキミングの違いとして自然に説明している。

本研究は、接続助詞によって統括される主節と従属節の表層分布を予測する新しいモデルとして、参照点起動の複合ドミニオン・モデルを提案している。このモデルは、従属節の事態を参照点として利用し、そこから因果関係によって想起可能な帰結の候補からターゲットとしての主節の事態を解釈するモデルである。これまでの認知言語学の参照点モデルでは、参照点が起動する文脈は一つに限定され、基本的に複数の文脈の起動は予測できない。本研究の注目すべき点は、参照点が複合文の文脈を起動する複合ドミニオン・モデルを導入している点にある。このモデルの導入により、主節と従属節の表層分布に関する事実(例えば、「P-(な)ので、Q-した」という接続表現は、「P」が従属節としての参照点として機能し、主節としての「Q」が、因果関係の帰結(すなわちターゲット)として従属節に後続する事実)が、参照点/ターゲットに関する一般的な情報機能の制約として予測されることになる。本研究は、さらにこの参照点モデルの導入により、助詞「ハ」/「ガ」の表層分布の再分析を試みている。先行研究では、基本的に「ハ」は話題(ないしは主題)の旧情報、「ガ」は主語の新情報を示す用法であるという事実は指摘されているが、この種の情報機能の認知的な違いは明らかにされていない。本研究では、「ハ」が、談話文脈においてある対象を焦点化する機能に注目し、「ハ」によってマークされる話題(ないしは主題)は、参照点の機能をなう存在として規定する。これに対し、「ガ」は「ハ」がマークする参照点が起動するターゲットとしての命題の叙述対象を認定するマーカーとして規定する。「ハ」と「ガ」に関する以上の規定が与えられるならば、従来の〈「ハ」=旧情報〉/〈「ガ」=新情報〉の区分は、参照点構造の一般的な機能の区分(すなわち、認知済みの参照点と情報付与のターゲットの機能の区分)からの自然な帰結として一般的に規定することが可能となる。これまでの言語学の研究では、助詞「ハ」/「ガ」の表層分布に関する、以上のような統一的な説明はなされていない。また、これまでの認知言語学の研究では、話題、主題にかかわるテキスト・談話の情報構造や因果関係、推論、等がかかわる意味関係、論理関係に関する参照点モデルの分析は試みられていない。本研究は、参照点モデルの分析を、文法研究だけでなく、意味論と談話・テキストの領域にかかわる言語現象に適用した試みとしても重要な研究と言える。

従来の認知言語学の参照点能力に基づく分析では、参照点は、目的の対象となるターゲットを同定するために話し手の側が利用する情報全般を指す概念として規定されている。本研究の独創的な点は、(i)参照点を経由してターゲットを認識するプロセスは、聞き手(ないしは解釈者)にかかわる認知プロセスである点、また、(ii)参照点の認定によって起動されるターゲットの候補の支配領域は、複合的な知識のドメインによって起動されるフレーム的知識である点を明らかにしている。また、本研究では、ラネカーの提唱している言語表現と発話事態のグラウンディングの概念を批判的に検討し、これまでの認知言語学の標準的な分析で提案されている参照点構造の発話事態の起動操作のなかに、話し手と聞き手の共有知識へグラウンディングする認知操作も含める新たな提案がなされている。本研究における参照点モデルに関する以上の提案は、語用論の分野における発話理解の研究(とくに発話理解における間接的な推論や会話の含意の分析)、発話事態のグラウンディングがかかわる直接照応と間接照応の研究(とくにテキスト・談話レベルにおける直接照応と間接照応の分析)のための新たな枠組みとしても重要な役割をなう。

本申請者が所属する環境情報認知論講座の目的の一つは、言語、知覚、思考、推論等にかかわる人間の知のメカニズムの解明にあるが、本研究は、この目的に沿った基礎的研究として高く評価できると共に、今後の言語学と認知科学の関連分野への貢献がさらに期待される。

よって、本論文は博士(人間・環境学)の学位論文として価値あるものと認める。また、平成16年12月22日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果合格と認めた。